

火のゆらめきと木のぬくもり

ホテルアジール・奈良(株式会社ワールド・ヘリテイジ)

創業からのあらましについて お聞かせください

父の事業を引き継ぎ、株式会社ワールド・ヘリテイジを設立したのが2000年です。そして、このホテルアジール・奈良はその年の12月にグランドオープンいたしました。私にとりましても、またノブレスグループ全体においても初めてのホテル事業でした。元々、ここには別のホテルがありました。廃業されて競売にかけられていたのを落札し、新たなホテルとして再生しました。

これまでホテル経営の経験はありませんでしたが、奈良パークホテルの著尾会長はじめ多くの先輩方のアドバイスをいただきながら手探り状態で最初の数年間を乗り切りました。



川井社長。今回のインタビューで楽しく語っていただきました。

時代に即応したサービスを、お客様に提供し続けたいと考えています。

また、社員たちには自ら学ぶことを推奨しています。私自身も立ち上げに携わった「奈良まほろばソムリエ検定」をはじめ、様々な資格取得やスキル向上には積極的に支援しています。

社員たちには、当ホテルを踏み台にしてどんどんステップアップして欲しいですね。むしろ、他社から注目され、引き抜かれるような魅力的な人材になってほしいです。
Q ミシユランのパビリオンマーク獲得についてお聞かせください
2011年、日本ミシユランタイヤ株式会社より発行された「ミシユランガイド 京都・大阪・神戸・奈良2012」に掲載され、宿泊部門において二つのパビリオンマークを取得しました。



落ち着いた雰囲気の室内。ゆったりくつろげます。

2009年12月に当ホテルに就任したばかりの中弥生支配人によって、新たな体制を組み立てている途中でのパビリオンマーク獲得は驚きでした。しかし、それまで積み重ねて



ホテルエントランス。ステキなステンドグラスがお出迎えてくれます。

客室の数が39室の小さなホテルということもありますが、いずれ団塊の世代の需要が伸びると考え、個人客の利用に焦点を絞り、よいサービス向上と人材育成に努めてきました。

初めてのホテル事業をここまでやってこれたのは、「ぶれないこと」「学び続ける」こと、この2つの気持ちを持ち続けてきたからです。激しく移り変わっていくグローバル時代にあわゆる「勝ち組」と「負け組」に分かれてしまつのは、この「ぶれず」そして休むことなく「学び続けられる」かどうかにかかっているのだと思います。

きた努力が評価されたということは大きな喜びであるとともに、モチベーションを保つていく上で非常に重要な経験となりました。

街中のたいした設備もない小さなホテルが、2つも星をいただいたのは、本当に稀有なことだと思えます。ミシユランに取り上げられたということは、グローバル基準の評価軸によって、評価に値すると認められたということです。ミシユランのガイドブックはフランス語や英語で書かれ、世界中の人々に読んでいただけるので、これからは幅広い層のお客様のニーズに添えていかなければならないとつくづく感じています。



ホテル全景

Q 将来の展望についてお聞かせください

今後は、料飲部門の更なる充実を考えております。ホテル内のレストラン「日本料理かがりや」をレベルアップさせるつもりです。宿泊部門よりも、工夫の余地が残されており、今後まだまだ改善していける部門だと思えます。

個人的に進めていきたいのは東日本大震災の被災地支援事業です。昨年の震災後の1年

Q ホテルのコンセプトについて お聞かせください

ホテルアジール・奈良の「ASYL(アジール)」とはギリシャ語で「癒し」「聖域」という意味です。

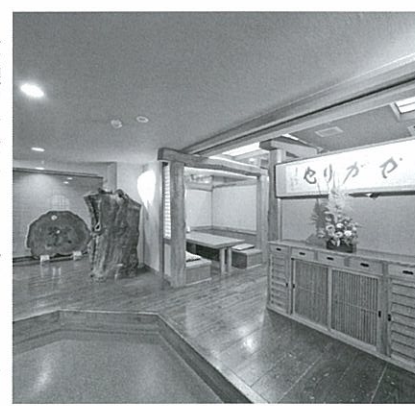
奈良は、古来から神と人間が共存する聖なる空間でした。現在でも、奈良の町には近代的な町並みがある一方で、春日の原生林や鹿がかつ歩する奈良公園など、静寂の中に心が和む自然の風景も残されています。そんな特別な場所である奈良を感じていただけるよう、当ホテルも「癒しの空間」をコンセプトとしています。

そのために心がけているのが、「火のゆらめきと木のぬくもり」です。ゲストルームは、心行くまでくつろいでいただけるよう、「木」の素材を生かした柔らかくぬくもりのある内装に仕上げられています。



ロビーにはホテルでは珍しい和テイストの囲炉裏スペースがあります。

間、被災地である岩手県大槌町を食や音楽で盛り上げようというプロジェクト「いわて三陸復興食堂」の支援に携わってきました。



「日本料理 かがりや」
おいしい料理と楽しいお酒!今日の疲れを癒します。

大槌町には、利用されなくなった国民宿舎があるので、これを復興作業に従事する人たちの宿舎にしたいと考えています。私たちがどのような形で関わるかは未定ですが、単に復旧・復興というだけでなく、その後も地域が再生していけるような仕組みを作り上げたいです。

私のテーマは「再生」です。建物とともにそれに付随する文化や歴史も蘇らせることを意識してきました。被災地再生事業と同時にこの奈良から日本と日本文化を再生していきたいです。まずはホテルアジール・奈良からこの構想を試していきたいと考えています。

Q 商工会議所への要望について お聞かせください

奈良を発展させるには、観光に訪れたお客様の利便性を拡大し、お客様の満足度を高めていくことが大切であると考えています。

例えば、なぜ奈良は車で来られるお客様が多いのか?を考えれば、車でない不便だか

また、ロビーには大きな暖炉を設置しており、火を入れることで、ぬくもりのある空間を体感していただけるような工夫も施しました。ロビーのとなりに設けた囲炉裏スペースは落ち着いた和のテイストをかもし出し、一般のホテルとはちょっと違った雰囲気を味わうことができます。これは、外国からのお客様に気に入られたようで、日本のマスコミよりも先に海外からの取材を受けました。

Q では、このコンセプトに沿ったホテル運営についてお聞かせください

当ホテルがもっとも力を入れているのは、人材育成です。人こそが財産であり、投資すべき対象だと考えています。

2010年に「平城遷都1300年祭」が開催され、当ホテルは例年よりも大きく売上を伸ばしました。そして、その分の利益は社員の評価システムの構築のために投資しました。それにより完成したのが、社員全員で話し合い考え出した信条や行動指針を定めた「クレド」です。このクレドの導入により、社員たちの最も輝く瞬間を捉え、適切にその能力を評価し、給与に反映させるシステムが明確化されることとなりました。

なお、クレドはバージョンアップしていきます。当ホテル内には「クレド委員会」があり、常に現状に見合ったクレドであるために更新させていきます。市場がどんどん変化していくなか、勝ち残るためには時代に応じて自分自身を変えていく必要があります。「老舗」と呼ばれるお店がどのような過程を経て老舗になりえたかという、顧客のニーズを読み、お店を変化させていったからでしょう。

らということも言えるのではないのでしょうか。交通渋滞を緩和するために「パーク&ライド」等で交通量を規制することはされていますが、それよりもまず、JRと近鉄のターミナル化をはかることをはじめ、車でもなくとも楽しめる街に自らが変わることだと思っております。

商工会議所には、そういったお客様目線の発想をお願いしたいと思いますし、自治体(奈良市)とともにイニシアチブをとって地域振興を進めていけることが肝要だと思います。

事業所概要

- ◆ つばやきカメラン
- 元をキュッと閉めて微笑まれる表情がとてもチャーミングで、親しみやすいのですが、話題が「経営(マネジメント)」や「人材教育」に及ぶとかなり熱く語ってくださいます。
- 「(言動が)ぶれないこと」、「従業員とは目線を合わせて話し合う」、そして「学び続けること」が重要であるという理念を披露していただきました。
- 「そこから引き抜かれるような社員にならない」と言い切るその背景には「金銭で引き抜かれな魅力ある会社になる」という自信の表れと感じました。観光業について話か及ぶと「観光に携わる人にはどんな人がいるか?」「インタビュアーに逆質問され、裾野の広い産業であることを丁寧に説明していただきました。
- 社員を育てることで、「教育」の重要性を熱心に訴えられていたのが印象に残りました。
- 本日はありがとうございました。

【取材協力】 帝塚山大学 春田千尋